

植民地朝鮮の大衆文化と近代メディア

— 競合する近代メディアと野談のメディア運動を中心に —

Colonial Popular Culture and Modern Media: Analyzing the Competition of Modern Media and the Cross-Media Spread of *Yadam*

朴 多情*

Dajeong Park

1. はじめに

アンダーソン (Anderson, 1991) によると、「想像の共同体」として「近代」を形成させた出版資本主義の拡大には、「母語」と「近代小説」という二つのキーワードが作動していた。近代の東アジアにおいて「近代小説」（特に歴史小説）の展開は、「昔話」また「歴史話」が母語を通じて伝統的な叙事様式で「活字化」され、それが西欧的な近代文学様式へ移行する過程だったといえる。母語小説によって「ネーション」としてイメージ化される直前の段階で「誰でも分かる」モノガタリが、近代資本主義システムの中での知識人たちの民衆啓蒙運動の時期において、人々の「モノガタリ」に対する欲求に応じながら大衆文化商品として作り出されたのである。植民地朝鮮ではそれが「野談」であり、帝国日本では「講談」であった。

しかし、野談が近代小説への移行過程の中で重要な役割を果たしたのは否定できないが、1920年代新しく登場して比較的早く幅広い

人気を獲得したことを、「母語」と「印刷メディア」だけで説明できるだろうか。確かに、野談の人気を朝鮮学熱風といった、植民地状況下における「朝鮮的なもの」に向ける欲望として解釈してきた従来の研究（ゴ・ウンジ、2008a; 2008b）は、「母語」と「印刷メディア」を通した朝鮮のナショナリズム形成に寄与した野談という研究観点では十分な説明になるかもしれない。しかし、このような観点には二つの限界がある。

一つは植民地朝鮮の二重言語状況に見出すことができる。朝鮮の言語環境は、各言語使用者の合意によって二つの言語が共存する bilingualism ではなく、植民者の言語である日本語と被植民者の母語である朝鮮語が、支配者の言語が加える象徴的暴力によって上位語と下位語で位階化された diglossia (Ferguson, 1959) である。このような状況は植民地朝鮮において母語によるネーションの均質的な統合を不可能

* 東京大学大学院学際情報学府・博士課程

キーワード：野談、近代メディア、重畳性、ダイグロシヤ

にした。政治社会的進出を狙う朝鮮人階層は植民地の「国語」として、日本語を積極的に習得、活用し、日本語を「近代語」として受け入れるが、また他方では、支配の利便性のための総督府のハングル綴字法の規範化と教育機会の拡大、そしてこれに便乗した朝鮮の知識人階層のハングル普及運動によって、ハングルもまた「近代的文字」への地位を獲得する。このため、公的領域への進出機会と言語教育へのアプローチが高い中産層以上では、積極的な日本語の受容とハングル・リテラシーの拡大があった。同時に1930年代初めまではハングルの文盲率が高かったため、ハングルは依然として普遍的な階層を確保することができなかった。また、1920-30年代半ばまでハングル使用の拡大が活発に進められたが、1940年代の戦時期には総督府によって言論、出版など公的な領域でのハングルの使用が制限された。このように階層的、時期的に単一化されえない言語状況では、朝鮮語の使用をハングル使用と解釈することはできず、戦時期の前と後の状況に対するそれぞれの解釈もまた必要であり、さらに言語使用の側面から見れば大衆文化の中でも政治的統制を受けるジャンルとそうでないジャンルの生産と消費の様相が大きく変わることを考慮しなければならない。すなわち、このような植民地朝鮮の重層的な二重言語状況においては、単純に母語を通じたネーションの形成という観点からのみ当時の野談の大衆的拡大を説明することには限界がある。

二つ目の限界は、近代野談が登場し大衆的人気を集め始めた1920年代後半から1930年代まで、識字率は十分に高くはなかったことにあ

る。1930年、朝鮮人口の識字率は、日本語＋ハングルが7%、ハングル16%で、日本語もハングルも解読できない人口が77%に達していた。近代野談は、ハングルだけで出版され、野談のターゲット消費層だった庶民大衆は、それを解読できる23%ではなく、読めず、ゆえに出版メディアへのアクセスが制限された77%に多く属していた。このような状況を考慮すれば、出版資本主義の展開の中で野談市場が庶民大衆を中心に拡大した条件を、「野談が母語を使った朝鮮の伝統的な叙事ジャンルであった」ことに求める説明は、説得的ではない。この不足を満たすためには、野談の大衆的拡大の背景として野談のジャンルの特性と拡大展開に注目する必要がある。具体的には、低いハングル識字率ゆえに出版メディアだけでは獲得不可能だった大衆の人気をどのように可能になったかを説明するために、野談が人気を集めるようになった時期の植民地朝鮮のメディア環境に注目する必要がある。

周知のようにオングのメディア論は、声の文化 (orality) と文字の文化 (literacy) による人間の世界認識の変容を見据えている。具体的には、一次的な声の文化 (口述)、一次的な文字の文化 (手書き文字)、二次的な文字の文化 (印刷)、二次的な声の文化 (エレクトロニクス) の変容とその変容に関わるメディアを取り上げているが、本稿で注目したい彼の観点は、orality と literacy がもつぱら断絶的な発展の方向性のみを持つのではなく、両者が互いに「重畳」(overlapping) したところである。本稿の研究対象である野談が置かれていた植民地朝鮮のメディア環境は、声の文化と文字の文化の複

雑な重なり合い、そのものだったのである。

2. 前近代野談—階層間世界観の衝突

野談は、朝鮮時代に「イヤギバン」で語り継がれた口語的な物語を、支配層の両班が漢文で記録し、漢文短編説話集として定着させたジャンルであった。「イヤギバン」では、二人以上が集まってお互いに語り合ったり、あるいは専門的な語り手と呼んで庶民の間で語り合う説話や逸話を両班たちが楽しんだりした。前近代野談は、忠、孝、女性の貞節などの伝統的な封建儒教の秩序を日常的な逸話や幽霊、動物、神秘的な現象などを媒介に伝える話が主たるものだったが、朝鮮後期に入ってから封建的身分制の崩壊の様相も反映され、これが編纂者の両班によって再び歪曲される⁽¹⁾など、社会の変化の中で口語文学が文字文学に移行する過程とその特徴を示す例でもある。オングのメディア変容図式によると、一次的口伝の声文化が筆写本の一次的活字文化に変容する時期であるといえる。

一方、このような漢文野談集の編纂と筆写が流行するようになり、一部ではあるが野談集のハングル翻訳本も登場することになる⁽²⁾。このハングル翻訳本は、朝鮮後期のハングルの使用階層であった、商業によって富を築いた中人

階層と支配層の両班家の女性たちによって消費された。彼らが最初から直接ハングル翻訳本を読んだのではない。初めはハングルで書いた物語を読む専門講読師たちを呼んで、彼らが生き生きと読み上げるのを楽しんでいただけで、この聞く経験が本そのものに対する彼らの好奇心に変わり、やがて講読師を通さず直接読むようになり、朝鮮後期の野談をはじめとするハングル物語集が流行するようになる。すなわち、男性支配階層によって編纂された漢文説話集がハングルに翻訳され、中人階層と女性支配層でも叙事文を読む営みが広まったのである。

このように、口語から活字へ、その活字の中でも漢字からハングルへのメディア変容および拡大を通じて前近代野談の生産と消費が行われるが、これはすなわち、メディア変容とともに階層間の世界観が衝突する過程の中で、野談の生産と消費が展開されたことを意味する。つまり、支配層と庶民、中人系層と支配層、男性支配層と女性支配層などの世界観の衝突が時代相を反映して物語を変奏し、前近代野談の聞き手と読み手の耳と目を捕らえたのである。

3. 近代野談の展開

3.1 金振九の野談運動

野談とは、中国の説書と日本の講談=その中でも新講談（堺利彦一派の新運動）を持ってき

てその長を取り、短を補してその上に朝鮮的な精神を取り入れ、絶対的に朝鮮化したものを創

設したのである。「野談出現の必然性(4)」『東亜日報』1928.2.5)

近代野談は、前近代の野談との決別を宣言して新たに誕生したジャンルであった。社会運動家だった金振九(キム・ジング)は、日本留学の時に経験した社会講談(上の引用の新講談)を通じて、庶民娯楽を社会啓蒙運動に活用することを目標とし、植民地朝鮮に近代野談を新たに紹介する。植民地的状況から脱皮するための力を養うために、朝鮮大衆を啓蒙させる大衆親和的娯楽ジャンルが必要だったのである。しかし、当時の野談は前近代漢文短編説話集の延長線上で生産と消費が行われており、内容的な面でも前近代的であったため、朝鮮大衆の近代的啓蒙という金振九の目的には全く合わなかった。とはいえ、一方で植民地的状況からの脱却のための社会運動を計画しながら、他方で講談という日本の叙事ジャンルを名称までもそのまま借用することは問題があった。それゆえ、朝鮮の野談という伝統ジャンルの名称だけを持ち出してきて、前近代野談と決別した新しい近代野談の誕生を大々的に広報し始めたのである。

まず、金振九は当時、漢文説話集として定着していた野談をハングル/朝鮮語と新しいメディアというまったく異なる条件から出発させた。つまり、漢文説話集に限られていた野談のメディア的場を完全に転覆させ、野談をハングルで新聞・雑誌に発表し、野談大会を通じて朝鮮語で公演した。最初から彼は声と文を同時に活用して朝鮮大衆に接近する計画であり、このために当時植民地朝鮮の社会啓蒙運動の中心だった民族新聞資本の全面的な支援を受けて、

新聞紙面に野談運動を広報し、新聞社主催の野談大会の開催を同時に進めたのである。

内容的な側面でも、金振九は前近代野談とはまったく異なる選択をしたが、この選択は彼が前近代野談との決別を強調した理由でもあった。金振九はまず、近代野談を教訓的な歴史話に限定した。特に、近代東アジアの重要人物や事件を通じて、近代的な啓蒙の重要性を大衆に伝えようとした。そのため、前近代野談の日常的逸話や幽霊、動物、神秘的な現象のような根拠のない話は、近代野談から排除された。また、金振九は朝鮮の植民地的状況の原因を支配層の腐敗と無能に見出し、そのような支配層の思想であった中華思想と封建的秩序は、彼にとって打破すべき第一の課題となった。それゆえ、支配層の歴史である正史は近代野談から排除し、朝鮮より先駆けて近代化を図った中国と日本の事例や、朝鮮民衆の抵抗、そして朝鮮の支配層によって政界から追放された改革的人物の話を中心に紹介した。特に金振九は、日本留学時から彼の政治思想的なロールモデルでもあった金玉均(キム・オクギョン)と彼の失敗した改革の試みである甲申政変⁽³⁾を野談を通じて頻繁に紹介した。このようにして、金振九の近代野談は、近代啓蒙的歴史話という性格を持つようになる。

洋服を着た野談家が壇上に上がって歴史講義をするように、観客に向かって一方的に話す金振九の近代野談は、前近代イヤギパンで語り手と聞き手が相互作用した口語的娯楽の形と異なり、また支配層によって漢文に記録され、素朴な趣味読物で流通していた形式とも異なっていた。当然、観客たちにとっても、これは前近

代野談とは違う全く新しいジャンルであった。彼の野談大会は首都圏を中心に忠清道の一部地域と開城など首都圏に近い主要都市で開催され、平均 300 人余り、最大 500 人余りの観客を動員した。

このように、金振九の近代野談運動は、野談大会という一次的な声メディア（身体メディア）を主軸にし、さらに新聞雑誌野談という二次的な印刷メディアを連動させる企図を持っていた。彼が野談市場の中心で活動したのは 1920 年代後半までで、30 年代に入ってから急激に活動が減少する。これは、結果的に尹白南（ユン・ベクナム）という当代の野談スター

3.2 尹白南の大衆的な野談

1928 年、朝鮮野談社創立 1 周年野談大会に尹白南が登場する。彼がどのような理由で野談大会に登場するようになったのかは、記録に残っていないが、ただ、時期的な類推は可能である。尹白南は国費留学生として日本で商業学校を卒業し、1909 年に帰国して金融業界に携わったが、1910 年に韓日併合で勧告退職した後、教師と新聞記者として生計を立て、退職と転職を繰り返す。同時に、劇団設立と映画演出で、韓国初の映画監督というタイトルを持つなど、1920 年代半ばまで朝鮮の映画史と演劇史に残る活発な活動を展開したが、その活動も興行にはつながらず、経済的な困難が増した。特に 1924 年、白南プロダクションを設立して本格的な映画製作に足を踏み入れたが、発表した 2 つの作品『沈清伝』と『開拓者』が興行に失敗し、1925 年に映画製作だけで 2000 圓の巨額の借金を抱えることになる。このような経済的

の登場が最大の影響を及ぼしたと言えるが、金振九ではなく尹白南に野談市場の主導権が移らざるをえない限界を、金振九の野談運動が最初から内包していたためでもある。社会運動家という金振九の背景と、日本の社会講談を借用した形式、そして近代東アジアの歴史物語という素材は、植民地朝鮮の大衆に新しい形式と内容の叙事ジャンルへの興味を誘発することはできたが、興味誘発だけで持続的な消費を生み出すことはできなかった。つまり金振九の野談は、時間が経つにつれて大衆の娯楽的な欲求を満たすことができなくなったのである。

困窮の中で、1920 年代後半、尹白南は演劇と映画関連活動をほとんどしなくなり、彼の最後の映画演出作の『正義は勝つ』が 1930 年に発表されるものの、その時期にはすでに映画より執筆活動に注力するようになっていた。経済的に困窮し、主に活動していた映画演劇界から手を引き始めたこの時期に、尹白南は野談大会に初めて登場している。30 代前半から半ば頃まで精力的に注力した映画製作で大きな失敗を味わった後に、経済的理由からも、彼の才能を他の舞台で発揮する必要からも、そして彼の才能に対する信頼の面でも、野談市場への尹白南の突然の進出は時期的に納得できる。ところで、大衆芸術人としての華やかな経歴以上に、彼の突然の登場が印象的である理由は、彼が、朝鮮野談社創立 1 周年野談大会に、朝鮮野談社の近代野談の趣旨を完全に無視した物語によって登場したからである。彼が野談市場に初めて本人

の名前を掲げて紹介した物語は、近代の啓蒙的歴史話ではなく、中国の前近代説話『杜佳春と金壺』であった。

センセーショナルな初登場後、尹白南の動きは、金振九の野談運動とは全く異なる性格を見せる。彼の物語は、燕山君をはじめとする朝鮮王室の秘話、中国の説話、前近代野談集の素材を借りた再創作、そして彼の人気大衆小説『大盗伝』、『黒頭巾』と類似した創作野談など、啓蒙的な話ではなく、徹底的に娯楽を目的にした物語であった。それは歴史講義のような話と比較した時に、はるかに大衆の娯楽的な欲求を満たせる選択であったし、彼のこのような選択が可能だったこと、またこの選択が大衆の歓迎を得られたのは、もちろん彼の大衆芸術人としての能力によるものだった。彼は当代の植民地朝鮮の近代小説の代表ともいえる李光洙(イ・グァンス)と肩を並べる唯一の人物と評価されるほどの筆力を持っており、すでに説明したように映画と演劇の演出家という経歴があった。つまり、声でも、文でも物語を構成する能力が卓越していたのである。多様な素材を扱うことがで

3.3 ラジオ野談

1927年、朝鮮総督府の主導で韓国最初の放送局である社団法人京城放送局(JODK)が設立される。植民地統治の効率性のための政策の一環として、ラジオ放送事業が始まったのである⁽⁴⁾。初期の京城放送局の放送は、一つのチャンネルで日本語放送と朝鮮語放送を交代で放送する混合放送で、日本語放送と朝鮮語放送の割合は7:3程度であった。しかし、このような混合放送は、2つの言語に対する理解が互いには

きる彼のこのような能力が野談の素材拡大を可能にし、大衆は彼に熱狂した。尹白南の野談に対する大衆の熱狂を示す端的な例として、尹白南の巡回野談大会が挙げられる。彼は31年から新聞社の後援を受けて全国的な野談巡回公演を回っているが、彼の巡回野談大会は朝鮮半島を越えて満州地域にまで拡大され、1000人余りの観客動員も難しくないほど大衆的人気を集めた(『東亜日報』1932.10.5、1934.3.7)。

しかし、金振九の野談運動の主軸となり、尹白南野談の大衆的人気を確認させた野談大会は、消費者の立場ではあくまでも一過性のイベントの性格が強かった。一つの庶民娯楽ジャンルとして、植民地朝鮮の大衆の日常に入り込むには、イベント的性格の野談大会では当然十分でなかった。尹白南の野談スターとしての位置は、彼が満州に移住して野談家としての活動をほとんどしなくなった1930年代後半以前までは続き、彼が満州に移住する頃にはすでに彼の後を継いで新しい野談家たちが野談市場に登場して野談の人気を保った。これを可能にしたのがラジオと雑誌の活用であった。

とんどなかった日本人と植民地朝鮮の大衆の両方にとって、不便なものとならざるをえなかった。相対的に少ない朝鮮語放送は効率的な植民地統治という京城放送局の設立趣旨にも合わなかったため、これを解決するため1932年日本語放送を第1放送とし、朝鮮語放送を第2放送とする二重放送を行う。言語によってチャンネルを分けたのである。そして、第2放送の放送課長に任命されたのが尹白南であった。

混合放送の時期以前にも金振九と尹白南のラジオ放送出演はもちろんあった。金振九は28年2月に（『中外日報』、1928.2.10）、尹白南は29年1月（『東亜日報』、1929.1.10）に初めてラジオ放送を通じて野談を口演した。しかし、相対的に少ない比率の朝鮮語放送時間中、ラジオ野談が編成されるのはしばしば難しかった。当時、野談は多くても月2～3回編成される程度に止まった。しかし、二重放送が始まり、第2放送に尹白南が投入され、野談は話が一本では終わらない「連続野談」の形式を含め、少なくとも週2回以上ラジオを通じて放送されることになった。

ラジオを通して野談の人气が朝鮮の中に溢れているのはもう久しい…（『朝鮮日報』1935.12.4）

上の引用のようにラジオによる野談の全国的で日常的な消費が可能になったのである。

尹白南の野談活動をもう少し具体的に見てみよう。1928年12月に初めて野談大会に登場した後、翌月の1929年1月にラジオ野談デビューをし、以後1929年度にほぼ毎月ラジオ放送を通じて野談を口演（計11回）した後、1930年1月の野談大会に再び登場する（『東亜日報』1930.1.14）。1928年の野談大会では金振九と尹

3.4 雑誌野談

植民地朝鮮の雑誌市場が雑誌社だけの力で、市場価値的な側面で安定的な時期を迎えたことはない。1920年代まで、主に一部の知識人を対象にした文学専門同人誌が創刊と廃刊を繰り返

白南を含めて4人の野談家が参加したが、1930年度野談大会では金振九と尹白南という二人構成へ変わり、1931年3月の朝鮮野談社新春野談大会に再び登場する時には尹白南単独の野談大会が開催される。そして1931年5月からやっと彼の名をかけて全国を回りながら巡回野談大会を進めるに至る。この野談大会は1936年まで盛況のまま続いた。ここから分かるのは、野談大会と放送野談が相まってシナジー効果をもたらし、尹白南の野談活動を拡大させているということである。そしてその間、『別件坤』（1926-1929）、『三千里』（1929-1942）などの大衆総合雑誌に文章の野談を寄稿する。すでに二重放送が始まる前から、尹白南の野談活動は、野談大会（口述）、雑誌野談（印刷メディア）、放送野談（エレクトロニクス）において同時に行われており、ラジオ放送野談の編成が拡大されたことで、野談の日常への浸透が本格化し、野談の大衆的人気は高まった。この人気に支えられ、1934年6月尹白南は、もう一つの近代メディアであるレコード市場にまで進出し、最初の野談レコードを取り入れる。素材は中国の歴史説話である『王小軍』（レガル、1934.6）であった。そして、尹白南は同年10月、最初の野談専門雑誌『月刊野談』（1934-1939）を創刊する。

返しており、総合大衆雑誌は代表的に『別乾坤』と『三千里』があったが、これらの販売部数は1930年代に入っても月平均5000-6000部を超えなかった。しかし1930年代に入り、比較的安

定的資本を確保していた民族新聞資本によって、様々な雑誌が創刊され、この新聞社発刊の大衆雑誌がターゲット消費層を細分化し、雑誌市場の多様性を生み出した⁽⁵⁾。このような流れの中で、そして野談の人気に支えられ、野談専門雑誌の創刊が可能になったのである。

尹白南の『月刊野談』は創刊号から大成功であった。初版が売り切れになって再版に入り、2万部の販売実績を上げた。これはもちろん1933年から本格化したラジオ野談の人気があったからこそ可能であった。当時、野談に関連して多数のメディアで活動していた尹白南の代わりに、非公式的に『月刊野談』の編集と発行を助けたのが、当代の有名小説家・金東仁（キム・ドンイン）であった。『月刊野談』の成功を最も近くで見た金東仁は1935年11月、別の野談専門雑誌『野談』（1935-1945）を創刊する。小説家の金東仁が野談市場に本格的に参入したことで雑誌野談は、中国、日本だけでなく西洋の小説まで野談で再創作し、このような素材の極端な多様化とともに、近代小説的な技巧が加わることで叙事進行の洗練美まで持つようになった。『月刊野談』と『野談』の競争の中で各雑誌当たり毎月120ページ以上の新しい野談を発表しなければならない圧迫によって、一部は前近代野談や説話をそのまま紹介するケース

もあったが、尹白南と金東仁を筆頭とする当代の有名な小説家たちが執筆陣として参加し、両野談雑誌は多数の高い水準の新しい野談を毎月消費者に提供し、それぞれ月平均9000部の販売を上げて商業的成功を続けていく。その結果、1936年、野談雑誌の販売支店は朝鮮半島を越えて満洲にまで拡張される（キム・ドンリ記念事業会、2013:29-31）。これは尹白南の野談大会が国境を越えて満洲に領域を広げた時期と一致する（『東亜日報』1936.4.23、4.24、4.26、4.28、5.15）。雑誌野談の成功はラジオ野談よりも安定的な野談の日常への浸透を可能にした。消費者は毎月、二つの野談雑誌を通じて、平均20本以上の新しい野談を定期的楽しむことができるようになったのである。

このように近代野談は、当時、植民地時代に登場した多くの近代メディアを同時に活動舞台として活用し、領域を広げていった。野談のこうした複数の近代メディアを行き来する同時多発的な活動と成功は、どのようにして可能だったのか。尹白南という万能大衆芸術家が偶然、野談市場に足を踏み入れたためだろうか。そうではなくむしろ、尹白南という万能大衆芸術家が同時多発的に活動できるための複数の近代メディアが、その時にそこに存在したからであった。互いに競争をしながら。

4. 植民地朝鮮のメディア環境と近代野談のメディア連動

4.1 近代メディア競合の場としての植民地朝鮮

1920年代は印刷出版メディアが安定期を迎え、声と映像の電子メディアが拡散するメディア変容の時期であった。植民地朝鮮の叙事ジャ

ンルである野談と同時性を持つ日本のジャンルとしては、伝統的な口頭芸が近代（歴史）小説の発展過程の中で一役を買った側面において、

講談が代表的な例として挙げられる⁽⁶⁾。日本の場合、17世紀から始まった活字メディアの発達とともに、明治期になると普通教育の拡大によって出版物の生産と消費の条件が満たされ、出版市場が拡大した。このような状況で、講談の速記本が大量流通し、講談は全盛期を迎える。大衆的に愛された講談が、浪花節に世代交代したのは、大正期活字メディアの安定⁽⁷⁾と声メディアの拡散というメディア変容と直接的な関連を持っている。すなわち、講談の興亡盛衰は、オングが提示したメディア変用の図式に忠実な展開過程を見せているのである。ところで、このようなメディア変容の時代に植民地朝鮮ではメディアの競合が行われるが、これは時間的差をほとんど開けずに複数の近代メディアが紹介されたからである。

ソウルは東アジアで電気、市街電車、上水道、電話、電信を一斉に導入した最初の都市だった。(カミングス 2003:205)

上記の引用のように、すでに日韓併合以前から近代的施設が一度に導入されたソウルの姿を当時ソウルに居住していた西洋人の記録を通じて知ることができるが、このような短期間の導入状況は近代メディアの場合でもさほど変わっていない。まず、新聞メディア(『独立新

聞』、1896)が19世紀末に導入され、『朝鮮日報』(1920)、『東亜日報』(1920)などの民族資本の新聞が創刊され、同新聞社を通じた雑誌の発刊などとともに、出版メディアがある程度成長したのが1920年代末～1930年代だった。蓄音機も最初の導入は新聞とほぼ同じ19世紀末-20世紀初で、趣味としてのレコードの流行とともに販売が急増したのは1930年代初めであった。ラジオの導入と普及は1927年に始まり、1930年代に着実に普及した。興行を目的としたフィルム映画が初めて上映されたのは1908年(『朝鮮映画小考』『朝鮮』1939.2月号)で、1920-30年代の映画鑑賞が一つの趣味として成長する。つまり、朝鮮では日韓併合に前後して印刷出版メディアと声・映像の電子メディア導入と普及がほぼ同時に展開しており、1920-30年代の植民地朝鮮は、メディア変容の過渡期ではなく、多様な近代メディアがほぼ同じ時期に出向いてお互いに競合を繰り広げた状況であったのである。印刷出版メディアと声映像メディアのどちらか一方のメディアが主導権を握って安定期にあったと言える状況ではなかった。

まさにこの時期、植民地朝鮮に新しく登場した近代野談は、万能大衆芸術家の尹白南によって、当時のほぼすべての近代メディアを活動舞台として活用することができたのである。

4. 2 叙事ジャンルの近代メディア連動—野談、講談、パンソリ⁽⁸⁾、浪花節

ここでは、近代メディアの段階的な変容を経た日本の類似ジャンルとの比較を通じて、野談の広がりや近代メディアの段階的な変容ではなく競合の中で可能であったことを分析する。ま

た、同じ時期に庶民大衆に愛されていた植民地朝鮮の別の叙事ジャンルであるパンソリとの比較を通じて、同じメディア環境の中に置かれていたのに、なぜ他でもなく野談が目立ったメ

ディア運動を見せたのかを説明する。

植民地朝鮮と日本において伝統口頭芸に基づいた代表的な叙事ジャンルとして、各々野談とパンソリ、講談と浪花節が挙げられる。講談と浪花節のように、ある程度野談とパンソリも叙事のネタを共有しているので比較対象としての意義が高まる。この4ジャンルはまた、ジャンルの性格によって野談と講談、そしてパンソリと浪花節へ分けられるが、叙事の内容伝達自体に娯楽性が集中するのは前者、節調が付いて叙事伝達以外の娯楽性が加わるのが後者である。

まず、基本的に近代メディアは印刷メディアも、声メディアも複製性とそれによる反復可能性を特徴とする。叙事伝達を主な目的とする野談と講談の場合、複製性は叙事の安定的な遠距離伝達と大量流通を可能にする。それゆえ、印刷メディアである雑誌が両ジャンルの主な舞台になりえたのである。しかしまた両ジャンルの場合、近代メディアの反復可能性はそれほど大きなメリットにはならない。いくら面白い話でも繰り返せば退屈になるものだ。それゆえ、複製して繰り返し聴取することが最も大きな魅力だったレコードは、最初から講談と野談が成功できるメディアではなかった。繰り返しの聴取ではなく単に所蔵目的で購入するには、レコードと蓄音機は、両ジャンルの消費層である庶民大衆にとってあまりにも高価であった。

一方、朝鮮のパンソリと日本の浪花節は伝統的な声ジャンルで、叙事を伝えることはできるが、消費大衆が両ジャンルに期待するのは基本

的に音楽的魅力である。両ジャンルの魅力は叙事伝達よりは音律を楽しめることにあったのである。それゆえ、両ジャンルは前近代では一次の声メディア（身体メディア）を通じて享受されたが、近代に入ってからレコードに代表される二次の声メディアを通じて大衆的人気を獲得した。

ここで問題になるのが代表的な二次の声メディアであるラジオである。当然パンソリと浪花節は頻繁にラジオの電波に乗り、大衆の期待に応えたが、講談の場合、ラジオがその人気を牽引する主要メディアに活用されず、レコードとラジオという二次の声メディアの台頭以降浪花節への世代交代を迎える。これはすでに講談の主要活動舞台が印刷メディアに移ったからであった。前述したように、日本の場合、出版メディアの安定期と以後の声メディアの台頭が段階的に行われた。それゆえ講談の全盛期は、先に安定期を迎えた印刷メディアによる講談速記本の大量流通が行われた明治20-30年代であり、この時からすでに講談師の存在理由が薄くなりつつある（兵藤裕己、2000：118-120）。ラジオが普及し始めた時には、既に浪花節の人気が講談を追い越していたのである（真鍋昌賢、1997：4）。しかし、日本の講談の一支流である社会講談を借用するほど、形式面でも叙事中心のジャンルという面でも最も似ている植民地朝鮮の野談は、講談と違ってラジオを通じて広まった。野談が大衆的人気を集め始めた時、ラジオの普及が行われたからである。

5. 野談のジャンルのな完結性の貧弱

野談の叙事ジャンルとしての特性と近代メディアの競合の場という植民地朝鮮のメディア環境の条件が合致し、野談は複数の近代メディアを横断して大衆的に拡散する。しかしここでまた、とりわけ野談が、植民地朝鮮の他のジャンルより、あるいは日本の伝統叙事ジャンルよりメディア連動において柔軟な様相を見せたことに他の理由はなかったか、と問うことが可能である。すべてをメディア決定論的に判断することには慎重になるべきである。

近代野談は、前近代野談と決別を宣言した際、形式的にも内容的にも使用メディアでも人為的な断絶を経験した。この人為的な断絶は、近代野談に教訓的な歴史話という限界的な枠組みを課してしまったが、これは言い換えれば、以前の前近代野談が持っていた伝統という枠を捨てたことも意味する。金振九が作った近代野談の社会運動的枠組みは、尹白南の登場と消費大衆の娯乐的欲求によって、3-4年後に再び解体されてしまう。したがって、1930年代の近代野談は伝統的な枠組みと新しい枠組みがすべて消えた状態になってしまったのである。物語の展開方式にも何らの典型も存在せず、声でも文でも表現できる極度に自由なジャンルになってしまったのである。興味をそそる物語でさえあれば、それは各種の近代メディア環境に合わせるように変形することができた。つまり近代野談は、パンソリ、講談、浪花節などの伝統を基盤にした植民地朝鮮と日本の当代の叙事ジャンルが持っていたジャンルの権威やジャンルの規定の厳しさを持たない状態になってし

まったのである。

このような近代野談の貧弱なジャンルの完結性を示すもうひとつの様相は、野談生産者たちにとって野談が副次的な手段であったという点である。少なくとも、野談家という職業が唯一で専門的であるケースはほとんどなかった。前述のように金振九の本業は社会活動家だったし、近代野談は彼にとって社会運動の手段に過ぎなかった。尹白南の場合、彼の職業は映画人、演劇人、放送人、大衆小説家、そして野談家だった。野談は特に、彼が経済的に困窮していた時期に大衆小説を書いておきながら、金稼ぎのために始めたことであった。尹白南と共に雑誌野談のルネサンスを作った金東仁も、本業は小説家であった。金東仁も当然金を稼ぐために野談雑誌を創刊した。尹白南に続き、1930年代半ばから野談市場の新しい中心となった申正彦（シン・ジョンオン）と兪推江（ユ・チュガン）にとっても野談家は、彼らの唯一の職業ではなかった。彼らはラジオ放送教養講演者、漫談家などの職業を同時に持っていた。

ところが、このような野談家の非専門性は「当代を代表する野談家は万能である」という条件につながった。すなわち、非専門化した野談が複数のメディアを舞台に大衆と出会い、いかなるメディアを通じても消費大衆を満足させる能力のある野談家が認められるようになったのである。植民地朝鮮のパンソリと近代日本の浪花節、講談の場合、創作者と演技者が分業化していたり、すでに典型に伝わって来る演目が決まっているのが一般的であった。それゆえ、こ

の三つのジャンルの場合、生産者というより演技者という名称がより自然である。しかし、野談の場合、野談家は野談の生産者だったし、具体的には作家であると同時に演技者でもあった。野談市場の主要人物のうち、金東仁を除いて、金振九、尹白南、申正彦、兪推江は、いずれも文でも声でも野談を創作し、それを基に演技も並行して行った。そのため、彼らの活動舞台は、野談大会、ラジオ放送野談、雑誌野談に渡る広いものであった。当然、各メディアの特性によって同じ生産者が作った同じ素材の話でも、基本的に野談の長さが異なり、展開方式も変わった。たとえば、尹白南が度々紹介した『王

昭君』のような作品は、野談大会では1時間にわたって口演されたし、ラジオ野談は与えられた約15分間、連続野談なら、2日間にわたって計30分間口演するように再構成された一方で、レコード野談で発売されたのは上下2枚合わせてわずか3分の長さであった。また、同じ物語を雑誌に寄稿する際には、10枚でも15枚でも、それよりさらに短い形式でも、野談雑誌に載せることができた。もし、近代野談に伝統の権威と厳格な枠組みが存在していたならば、いくら同時代の近代メディアが競合する状況にあったとしても、このような極度に柔軟なメディア運動は難しかっただろう。

6. 終わりに

本稿では、植民地朝鮮の近代野談の大衆的人気の理由を、植民地朝鮮の近代メディア環境を通じて確認した。

朝鮮後期の封建的社会的崩壊とともに、口語から文字に、また漢字からハングルへ野談のメディアが変動し、これを通じて庶民と支配層、中人階層と支配層、男性支配層と女性支配層間の世界観が衝突して物語が豊かになり、これが前近代野談の人気につながった。

近代野談は、前近代野談との決別とともに近代メディアが競合する場になった1920年代後半植民地朝鮮に新しく誕生し、識字率の低い庶民大衆の物語の聞き取りと読み取りに対する欲求と出会い、大衆的に拡散した。そしてこれをより容易にしたのは、厳格なジャンルの枠組みをもっていない野談の自由さであった。しかし、皮肉なことに、このような自由さはまさに

ジャンルの完結性の貧弱さを意味した。パンソリ、講談、浪花節がそれぞれ限定的メディアに限られ、そのメディアに合うジャンルの完結性をさらに発展させていき、戦後も伝統的敘事ジャンルとして維持されたり、また講談の場合であれば時代小説として発展したのとは異なり、野談は終戦とともにその大衆的基盤を急激に失った。メディアの側面で、植民地時期の近代野談はジャンルの完結性よりも柔軟なメディア運動を通じて、約25年間の短い期間、量的・規模的膨張のみを追求したためであった。単純に執筆陣が重なるという事実だけでも、植民地時代の近代野談と同時代の大衆小説および歴史小説との連関性を否定することはできないのだが、既存の文人たち自身は野談の自由さ、すなわち、貧弱なジャンルの完結性を理由に、野談と線を引き距離を取ることを怠らなかった。

戦後の韓国のメディア環境は、競合ではなくラジオとテレビの声・映像メディアがともに中心となり、60年代まで雑誌やラジオを通じて野談が紹介されはしたが、テレビの時代の幕明けとともに、野談は完全に大衆の記憶から消えた。それが近代野談の終焉であった。

戦時期の戦争システムを活用した野談の堅固な日常的消費と戦後の野談の急激な退潮は、二重言語状況下で野談が朝鮮語／ハングルで生産されたという点と深い関係があるだろう。戦時期朝鮮総督府の野談生産における朝鮮語許容は、野談のプロパガンダ的活用のためであった。しかし、これは同時に野談を通じた「内鮮一体」というプロパガンダがそもそも不可になる前提となる。日本語で表現されない野談、朝

鮮語のみで生産・消費が行われる野談は、生産者とパフォーマンサー、そして消費者を言語から既に内鮮一体と乖離した状況に置かせる。また、終戦による強制的二重言語状況の終結は、野談市場の瓦解に影響を及ぼしただろう。つまり、野談の最大の特徴である朝鮮語／ハングルの使用が、戦時期統制された他のジャンルにまで普遍化し、他のジャンルが特定メディアに安着してジャンル内的な発展を繰り返した結果、野談だけが具現できた排他的面白みが縮小・制限されざるを得なかっただろう。ここで重要なのは、こうした戦時期と戦後における野談の様相が「ネーションのイメージ化」では包摂できない地点を指しているということだが、これについては別稿で扱うことにしたい。

註

- (1) 庶民たちの口伝物語を野談集に記録した両班たちは、記録に「評決」を加えて支配階層の観点から物語を評価したが、これを通して主題の歪曲を試みた場合も多い。例えば、朝鮮後期の文臣・李源命(1807-1887)が編著した野談集『東野叢輯』に載った「少妓伴狂赴芳約」が挙げられる。妓生梅花と地方官吏の切ない愛という内容だが、李源命は「評決」で二人の愛は、地方官吏が登場する前から梅花を深く寵愛していた李・參判に対する裏切りだと述べている。二人は各々両班と上司を裏切って身分と階層の秩序を乱したというのである(イ・ガンオク、2018: 41-42)。
- (2) 野談集の中で、現在、ハングル本があると知られているのは、『欧野譚』、『天芸録』、『銅牌楽松』、『浮談』、『青丘野談』、『学山漢彦』などである。このうち、『学山漢彦』はハングル版があるという記録が残っているだけで、野談集自体は確認されていない(イ・ガンオク、2018: 48)。
- (3) 1884年、金玉均(キム・オクギョン)を中心とした急進開化派が開化思想を土台に清からの朝鮮の政治的独立と近代化を目指して起こした政変。清の軍事力によって3日で改革は挫折、金玉均は日本に亡命し、日本のアジア主義者たちと交流しながら、朝鮮の近代化を模索したが、1894年に上海で暗殺された。
- (4) 京城放送局は、植民地統治の効率性を高めるために設立されたゆえ、総督府の影響力下で官営的な性格が強かった。無線電信法第1条には「無線電信及び無線電話は、政府が管掌する」と明示されており、放送局運営を担当する理事会は日本人で構成され、彼らの中から推薦された一人が総督府通信局長の承認を受けて理事長を務めた(放送委員会、2000)。
- (5) 東亜日報社の『新東亜』(総合大衆雑誌)、『新家庭』(女性雑誌)、朝鮮中央日報社の『中央』(総合大衆雑誌)、『少年中央』(子ども雑誌)、朝鮮日報社の『朝光』(総合大衆雑誌)、『女性』(女性雑誌)、『少年』(子ども雑誌)など。
- (6) 講談と日本近代文学との関係については、(岩本憲児、2006: 14-18; 小林真二、2004)が参考になる。
- (7) 明治維新以降新聞・雑誌を中心として拡散した活字メディアは、大正デモクラシーと第一次大戦による景気好況に支えられ、需要と供給面で安定期を迎える。これがまた関東大震災を経て情報に対する欲求の拡大という社会的条件と、景気低迷による製紙業とインク産業分野の在庫処理という物理的条件が合い、活字メディアの爆発的大量生産と流通が行われる(佐藤卓己、2002: 12-25)。

- ⑧ 節をつけて物語の叙事を伝達する韓国の伝統芸の一ジャンル。一人の演者（ソリケン）が鼓手の鼓拍子に合わせて唄（ソリ）・言葉（アニリ）・身振り（ノルムセ）を混ぜながら口演する一種の一人オペラ。「パンソリ」は「パン」と「ソリ」の合成語で「ソリ」は「音楽」を、「パン」は「多い人が集まった場」または「状況と場面」を意味し、「多い聴衆が集まった遊び場で歌う歌」を意味する（『文化財庁国家文化遺産ポータル』、http://www.heritage.go.kr/heri/html/HtmlPage.do?pg=/unesco/CulHeritage/CulHeritage_02.jsp&pageNo=1_3_2_0, 2019.9.6）。

参考文献

【新聞・雑誌資料】

『東亜日報』、『朝鮮日報』、『中外日報』、『月間野談』、『野談』、『朝鮮』

【本・論文】

- 안중화 (1962) 「한국영화사에 빛나는 사람들 - 예단의 변종 윤백남」 『女苑』 女苑社
- 김동인 (1976) 「문단 30 년사」 『김동인전집』 6 三重唐
- 김동리기념사업회 (2013) 「회상」 『김동리문학전집 30』 季刊文芸 29-31
- 김준현 (2002) 야담운동의 출현과 전개의 양상 민족문학사연구 20, 146-77
- 고은지 (2008a) 「1920년대 오락물로서 역사의 소비 - 야담방승과 『월간야담』 을 중심으로」 『대중서사연구』 (14) 192-224
- (2008b) 「20세기 「대중오락」 으로 새롭게 태어난 야담의 실체」 『정신문화연구』 31 (1) 103-129
- 곽근 (1997) 「윤백남의 생애와 소설」 『東岳誤文論集』 (32) 403-427
- 이강욱 (2018) 『한국 야담의 서사세계』 돌베개
- 兵藤裕己 (2000) 『「声」の国民国家・日本』 日本放送出版協会
- 岩本憲児 (2016) 『「時代映画」の誕生 - 講談・小説・剣劇から時代劇へ』 吉川弘文館
- 小林真二 (2004) 「一九三三年の新講談 - 林不忘 『新講談丹下左膳』 の試み」 『國學院雑誌』 105 (11), 340-352
- 真鍋昌賢 (1997) 「愛国浪曲をめぐる葛藤 - ポップピュラーな語り物を分析するための視点」 『大阪大学日本学報』 16, 1-29
- 中山弘明 (2001) 「「社会講談」という戦法 - 世界戦争と民衆芸術」 『国文学研究』 早稲田大学国文学会
- 佐藤卓巳 (2002) 『キングの時代 - 国民大衆雑誌の公共性』 岩波書店
- Anderson, Benedict (1991=2003) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nations*, Verso. (ユン・ヒョン 스킵 『想像の共同体 - 民族主義の起源と伝播に対する考察』 ナナム)
- Cummings, Bruce (1997=2003) *Korea's Place in The Sun: a Modern History*, W.W.Norton Company. (横田安司、小林知子訳 『現代朝鮮の歴史 - 世界の中の朝鮮』 明石書店)
- Ferguson, Charles A. (1959) Diglossia. *Word* 15: 325-340.
- Ong, W.J. (1982=1991) *Orality and Literacy: the Thechnologizing of word*, Methuen. (桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳 『声の文化と文字の文化』 藤原書店)



朴 多情 (ばく・だじょん)

【専攻領域】 カルチュラル・スタディーズ、メディア史

【主たる著書・論文】

「戦間期日本の大陸政策と野談市場の拡張 - 1930年代ユン・ベクナムの野談大会を中心に」 『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』 95号 29 - 44, 2018.10

【所属】 東京大学大学院学際情報学府博士課程

Colonial Popular Culture and Modern Media: Analyzing the Competition of Modern Media and the Cross-Media Spread of *Yadam*

Dajeong Park*

This paper examines *Yadam*, a modern Korean narrative and performance genre, from the perspective of media studies. By dissecting *Yadam*'s popularity in 1920s-30s colonial Korea, this study reveals a modern media environment rife with competition among print, radio, and even performance/lived voice.

This research challenges previous academic interpretations attributing *Yadam*'s popularity to the desire for 'Joseon-esque' among the colonial subjects of Joseon. Such explanations simply situate the popularity of modern *Yadam* in its contribution of print media and native language to the formation of modern nationalism, as *Yadam* was published in Korean, with the support of newspaper capital, and in professional (its own genre) magazines.

There are two limitations in explaining the popularity of *Yadam* in these terms of print media and national language. It was impossible to form a single native language based 'imagined community' due to the hierarchical diglossia of colonial Joseon, while an almost eighty-percent illiteracy rate restricted accessibility to print media among colonial subjects of Joseon.

Putting aside the question of how much of a 'Joseon-esque' genre *Yadam* actually was, it was performance/lived and radio media alongside, or even more pivotal than print media, which enabled the popular success of *Yadam*. Created to enlighten the illiterate eighty percent, it appealed to people using both the spoken and written word from the very beginning. After gaining popular recognition with nation-wide performance tours and newspaper serializations, the launch of radio and magazine publications from the 1930s saw *Yadam* become commercially successful and deeply ingrained in the everyday lives of the people in colonial Joseon.

Yadam simultaneously spread across media platforms/media linkages because modern media such as newspapers, magazines, and radio were introduced concurrently at the beginning of the 20th century and locked in tight competition. The non-professionalism of *Yadam* producers/creators also led to a lack of rigid genre-specific frameworks, which enabled *Yadam* to flexibly adapt to such a

* Doctoral Student, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies The University of Tokyo

Key Words : *Yadam*, Modern Media, Overlapping, Diglossia

media environment. Thus, Yadam was able to spread rapidly and widely because, in the absence of characterizations limited to either print media or sound media, its creators could freely modify it to accommodate each media platform.